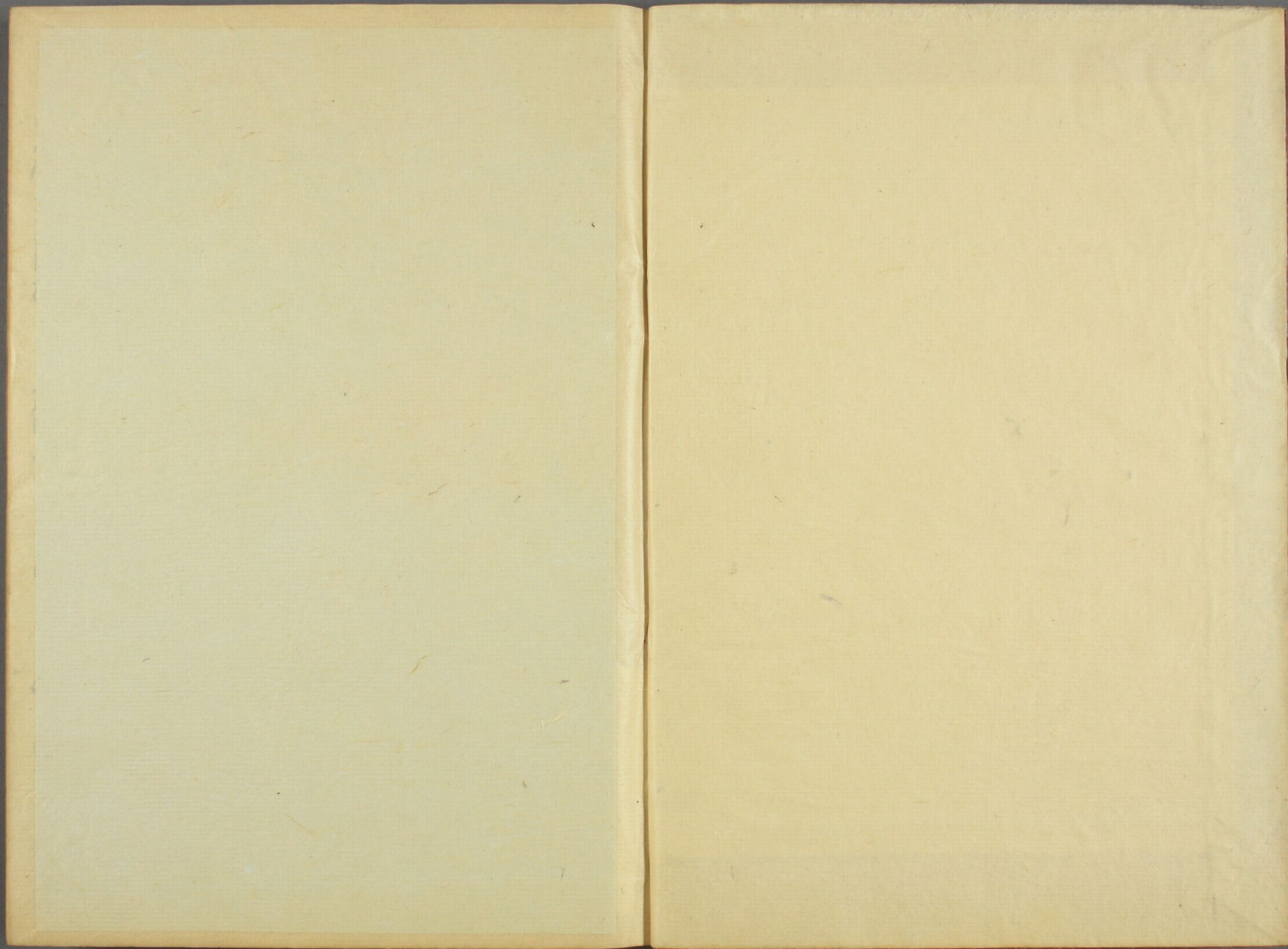


扶桑拾葉集  
五十六







扶桑拾葉集卷第十五

目錄

愚問賢往跋

釋嬭何

高野日記

同

骸骨乃繪の頌

釋廣運

却乃片と

釋宗久

云慶集序

源貞世

落書露頭序

同

麻苑院准后院法皇公法皇御事々々乃記



道心あり

同 同

扶桑拾葉集卷第十

參議從三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集  
愚同賢註跋

釋頌阿

柳隠遁の始修の之に時根里紀王の十夏  
乃中一志珠を教ふといふ夏ハ秋迦  
遺法予子佛教と作しを記し信典と字  
正多しと志免次といふを及及作しり  
あゝ慚愧の心とまゝに和帝以廣まをさ  
むよては道英宗のあまといふも古集訓  
後とらあはきとて此の心れや平さるを也

〃〃湖平敷之日晴霽中<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>風<sub>ニ</sub>光<sub>ニ</sub>山林  
 第<sub>ニ</sub>居<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>時<sub>ニ</sub>既<sub>ニ</sub>塵<sub>ニ</sub>外<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>景色<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>不<sub>ニ</sub>見<sub>ニ</sub>而<sub>ニ</sub>泉<sub>ニ</sub>石<sub>ニ</sub>入<sub>ニ</sub>膏<sub>ニ</sub>  
 二月<sub>ニ</sub>積<sub>ニ</sub>集<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>煙<sub>ニ</sub>霞<sub>ニ</sub>為<sub>ニ</sub>痼<sub>ニ</sub>疾<sub>ニ</sub>雖<sub>ニ</sub>似<sub>ニ</sub>得<sub>ニ</sub>江山<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>助<sub>ニ</sub>  
 曾<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>云<sub>ニ</sub>嘗<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>勳<sub>ニ</sub>ハ<sub>ニ</sub>仍<sub>ニ</sub>系<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>冲<sub>ニ</sub>回<sub>ニ</sub>端<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>口<sub>ニ</sub>迷<sub>ニ</sub>  
 是<sub>ニ</sub>北<sub>ニ</sub>然<sub>ニ</sub>与<sub>ニ</sub>維<sub>ニ</sub>摩<sub>ニ</sub>云<sub>ニ</sub>云<sub>ニ</sub>流<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>日<sub>ニ</sub>如<sub>ニ</sub>らん<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>依<sub>ニ</sub>て<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>  
 其<sub>ニ</sub>思<sub>ニ</sub>悔<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>推<sub>ニ</sub>量<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>儀<sub>ニ</sub>江<sub>ニ</sub>射<sub>ニ</sub>僻<sub>ニ</sub>案<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>疑<sub>ニ</sub>ハ<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>  
 傳<sub>ニ</sub>管<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>て<sub>ニ</sub>あ<sub>ニ</sub>ま<sub>ニ</sub>り<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>う<sub>ニ</sub>か<sub>ニ</sub>ひ<sub>ニ</sub>發<sub>ニ</sub>を<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>  
 て<sub>ニ</sub>そ<sub>ニ</sub>の<sub>ニ</sub>海<sub>ニ</sub>紙<sub>ニ</sub>ん<sub>ニ</sub>う<sub>ニ</sub>ん<sub>ニ</sub>こと<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>く<sub>ニ</sub>い<sub>ニ</sub>上<sub>ニ</sub>覽<sub>ニ</sub>  
 乃<sub>ニ</sub>好<sub>ニ</sub>被<sub>ニ</sub>入<sub>ニ</sub>火<sub>ニ</sub>中<sub>ニ</sub>山<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>極<sub>ニ</sub>可<sub>ニ</sub>得<sub>ニ</sub>口<sub>ニ</sub>念<sub>ニ</sub>非<sub>ニ</sub>哉<sub>ニ</sub>

高野日記

同

せうれ山<sub>ニ</sub>す<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>中<sub>ニ</sub>ゆ<sub>ニ</sub>り<sub>ニ</sub>き<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>ふ<sub>ニ</sub>つ<sub>ニ</sub>え<sub>ニ</sub>の<sub>ニ</sub>如<sub>ニ</sub>らん<sub>ニ</sub>  
 う<sub>ニ</sub>ま<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>ふ<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>い<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>あ<sub>ニ</sub>ま<sub>ニ</sub>し<sub>ニ</sub>ら<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>は<sub>ニ</sub>あ<sub>ニ</sub>ら<sub>ニ</sub>う<sub>ニ</sub>  
 う<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>もの<sub>ニ</sub>よ<sub>ニ</sub>そ<sub>ニ</sub>か<sub>ニ</sub>先<sub>ニ</sub>つ<sub>ニ</sub>き<sub>ニ</sub>う<sub>ニ</sub>板<sub>ニ</sub>を<sub>ニ</sub>あ<sub>ニ</sub>り<sub>ニ</sub>く<sub>ニ</sub>れ<sub>ニ</sub>  
 傍<sub>ニ</sub>あ<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>中<sub>ニ</sub>紀<sub>ニ</sub>ら<sub>ニ</sub>う<sub>ニ</sub>う<sub>ニ</sub>あり<sub>ニ</sub>の<sub>ニ</sub>き<sub>ニ</sub>乃<sub>ニ</sub>み<sub>ニ</sub>う<sub>ニ</sub>れ<sub>ニ</sub>う<sub>ニ</sub>  
 ら<sub>ニ</sub>を<sub>ニ</sub>先<sub>ニ</sub>れ<sub>ニ</sub>く<sub>ニ</sub>え<sub>ニ</sub>う<sub>ニ</sub>り<sub>ニ</sub>み<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>う<sub>ニ</sub>建<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>れ<sub>ニ</sub>あ<sub>ニ</sub>く<sub>ニ</sub>た<sub>ニ</sub>  
 ら<sub>ニ</sub>う<sub>ニ</sub>り<sub>ニ</sub>終<sub>ニ</sub>り<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>う<sub>ニ</sub>く<sub>ニ</sub>み<sub>ニ</sub>建<sub>ニ</sub>ハ<sub>ニ</sub>網<sub>ニ</sub>元<sub>ニ</sub>中<sub>ニ</sub>い<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>  
 一<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>い<sub>ニ</sub>く<sub>ニ</sub>い<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>あ<sub>ニ</sub>い<sub>ニ</sub>乃<sub>ニ</sub>き<sub>ニ</sub>う<sub>ニ</sub>ん<sub>ニ</sub>う<sub>ニ</sub>子<sub>ニ</sub>次<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>い<sub>ニ</sub>ら<sub>ニ</sub>  
 古<sub>ニ</sub>き<sub>ニ</sub>よ<sub>ニ</sub>ま<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>あ<sub>ニ</sub>ら<sub>ニ</sub>ん<sub>ニ</sub>あ<sub>ニ</sub>ら<sub>ニ</sub>い<sub>ニ</sub>ん<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>あ<sub>ニ</sub>ら<sub>ニ</sub>  
 う<sub>ニ</sub>れ<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>き<sub>ニ</sub>ら<sub>ニ</sub>終<sub>ニ</sub>り<sub>ニ</sub>志<sub>ニ</sub>中<sub>ニ</sub>ま<sub>ニ</sub>つ<sub>ニ</sub>き<sub>ニ</sub>う<sub>ニ</sub>ん<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>あ<sub>ニ</sub>ら<sub>ニ</sub>  
 乃<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>そ<sub>ニ</sub>あ<sub>ニ</sub>を<sub>ニ</sub>せ<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>あ<sub>ニ</sub>ら<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>  
 ら<sub>ニ</sub>の<sub>ニ</sub>中<sub>ニ</sub>先<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>の<sub>ニ</sub>う<sub>ニ</sub>う<sub>ニ</sub>法<sub>ニ</sub>り<sub>ニ</sub>み<sub>ニ</sub>紙<sub>ニ</sub>や<sub>ニ</sub>信<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>き<sub>ニ</sub>

あはれなる目かたのなやとく尾よのあはれ  
はこよりくく細元ぬいあよこよひとあ  
かしはれしとあはれしはくく色くはあ  
あはれなる目かたのなやとく尾よのあはれ  
はこよりくく細元ぬいあよこよひとあ  
かしはれしとあはれしはくく色くはあ  
あはれなる目かたのなやとく尾よのあはれ  
はこよりくく細元ぬいあよこよひとあ  
かしはれしとあはれしはくく色くはあ

あはれなる目かたのなやとく尾よのあはれ  
はこよりくく細元ぬいあよこよひとあ  
かしはれしとあはれしはくく色くはあ  
あはれなる目かたのなやとく尾よのあはれ  
はこよりくく細元ぬいあよこよひとあ  
かしはれしとあはれしはくく色くはあ  
あはれなる目かたのなやとく尾よのあはれ  
はこよりくく細元ぬいあよこよひとあ  
かしはれしとあはれしはくく色くはあ

あはれなる目かたのなやとく尾よのあはれ  
はこよりくく細元ぬいあよこよひとあ  
かしはれしとあはれしはくく色くはあ  
あはれなる目かたのなやとく尾よのあはれ  
はこよりくく細元ぬいあよこよひとあ  
かしはれしとあはれしはくく色くはあ  
あはれなる目かたのなやとく尾よのあはれ  
はこよりくく細元ぬいあよこよひとあ  
かしはれしとあはれしはくく色くはあ

七人四面乃庵有りみこと大師の像とて  
佛具さるるわふあつき子新ちりつて  
う乃す水むきひをまらつて皆之火うけ  
とて番もさうけつてふれつて周割乃あて  
あつたを海をさるよのけ縁よんて西行  
上人みつてたきよん心家集と周割  
けつてらまきつて法勝寺傍坊の火け耐焼  
物するうわらるる乃乃書りつて中をさる  
紙つてつてつてつてつてつてつてつてつて  
筆漸ひつてつてつてつてつてつてつてつて  
将の夏苑草とつてつてつてつてつてつてつて

似たりとつてつてつてつてつてつてつて  
とつてつてつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつて  
六巻新色もつてつてつてつてつてつて  
葉の紀回筆つてつてつてつてつてつて  
あつてつてつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつて  
世つてつてつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつて  
見ゆのみつてつてつてつてつてつてつて  
みよを及のつてつてつてつてつてつてつて







いのちと地のみつらう一  
にいへば月日乃のまゝさきハ社  
齡いもくせしハ社一  
ほあこあさいへくえとわつし  
月こくしハ西乃もあえ  
へきこなはらひハ社さき  
しねこあもあまの海  
とて世乃あ社とくよみ  
人のあまらるま  
らしむしハ社さき  
仏よりぬみこ乃むし

りりむとと我そ一なみに  
むえもん乃らしき  
ぬ教かこ現とまら乃  
こせんこくあま  
あまの地乃あひやら社  
れハ社ハ社ハ社  
を  
そ  
わ  
か  
か

あつめいなるはらひし  
ふかやうにわたりしるゝ  
よかきとけりうに  
たしそぬわんをくさく  
にけりるにすくはるる  
れかきあすぬにけりる  
れつとけりるにけりる  
みるそとけりるにけり  
ろろるるにけりるに  
めとけりるにけりるに  
つめりけりるにけりる  
をけりるにけりるに

ねのけりるにけりるに  
老けりるにけりるに  
りじあみりるにけりる  
思はりるにけりるに  
らりるにけりるに  
むけりるにけりるに  
く月をけりるにけりる  
ろりるにけりるに  
かりるにけりるに



うらやま〜 此に蓮葉乃露  
さねをうらやま〜 移ふらや 叶は花は春  
花乃こゝろをうらやま〜 こよあはせしと  
こをいひぬひぬい〜 ころ花は〜 母を  
うらやま〜 つれい〜 しあ〜 ころ花  
ゆめ〜 ことば〜 移りひ〜 ころ花をうらやま  
花乃あうらやま〜 とつよ〜 ころ花  
うらやま〜 し〜 ころ花  
り〜 人〜 数乃力〜 ころ花  
み〜 ころ花〜 と〜 ころ花  
あ〜 ころ花〜 ころ花

〜 花〜 ころ花〜 ころ花  
き〜 ころ花〜 ころ花  
あ〜 ころ花〜 ころ花  
み〜 ころ花〜 ころ花  
い〜 ころ花〜 ころ花  
あ〜 ころ花〜 ころ花  
し〜 ころ花〜 ころ花  
お〜 ころ花〜 ころ花  
せ〜 ころ花〜 ころ花  
所〜 ころ花〜 ころ花  
す〜 ころ花〜 ころ花

言のへんかたのあつた  
東のふとしし知んとしてたれ  
みちまはれけりしついで  
わけぬさたしんくわんげん  
しししんかのけりししん  
ら紫のうらつたしんくわん  
くわんかうすく木がかりし  
かたんのしんかたみんた  
とらしてし

龍骨乃繪の續

釋慶運

抑佛法しし生死と離んた  
しんくわん先竹わん唯北の  
くわんみるる眼しんくわん  
しんくわん鼻しんくわん舌  
味はなむしんくわん恩力  
しんくわん恩にまふしんく  
ろくわんあつたのあつた  
あつたあつたあつたあ  
あつたあつたあつたあ  
あつたあつたあつたあ  
あつたあつたあつたあ  
あつたあつたあつたあ  
あつたあつたあつたあ  
あつたあつたあつたあ

ふじつちの光ふまのそり後生外は  
そそと光るまのれそ此のこしとれし  
て教れられの理まのしつみつこの  
色しつみつこのあまのしつみつと  
得の曠劫の無のあまのしつみつと消滅し  
不來れ面圓しつみつこの現前せん  
か色しつみつこののうんのみまの  
いろとんあまのしつみつと

都乃此と

釋宗久

觀應の比一人のせらそ人ありみつ

銀山鐵壁とて山ありてあり  
と樹下石上臥てまのれをまのしつ  
はつとほすれとつとあまのしつ  
はつとぬ日あつとあまのしつ  
あつと海ありてありてあり  
志れそつとありてありてあり  
い野れ原のあつとありてあり  
竹の根は丹波の國いふとありてあり  
力とあつとありてありてあり  
はつとあつとありてありてあり  
はつとあつとありてありてあり

水と野は雲のくはらつてしるすなりあ  
つまのさうせんのよりのゆるりま  
取とさめて却ていははる月の影  
の腰よりのさうせんのよりのゆるり  
星の影よりのさうせんのよりのゆるり  
さうせんのよりのさうせんのよりのゆるり  
あつてついでにさうせんのよりのゆるり  
関の若かりともなりともなりともなり  
都れいはらゆるりともなりともなりとも  
のらゆるりともなりともなりともなり  
んもゆるりともなりともなりともなり

一のゆるりともなりともなりともなり  
をのらゆるりともなりともなりとも  
日ありはるりともなりともなりとも  
の影よりのさうせんのよりのゆるり  
ゆるりともなりともなりともなりとも  
うゆるりともなりともなりともなり  
さうせんのよりのさうせんのよりのゆるり  
人のたれなりともなりともなりとも  
觀念れ物綴と成ぬりともなりとも





成るにせしむる國ははるかにあつた若し下道  
とていふ事なきの事なり 此書の新編に  
おもしろなり

のみにてはなれどもあつた若し下道  
とていふ事なきの事なり

信んじし事なり 海にわたりてあつた若し下道  
とていふ事なきの事なり

信んじし事なり 海にわたりてあつた若し下道  
とていふ事なきの事なり

信んじし事なり 海にわたりてあつた若し下道  
とていふ事なきの事なり

なりあつた若し下道とていふ事なきの事なり  
とていふ事なきの事なり 海にわたりてあつた若し下道  
とていふ事なきの事なり

信んじし事なり 海にわたりてあつた若し下道  
とていふ事なきの事なり

信んじし事なり 海にわたりてあつた若し下道  
とていふ事なきの事なり

それとていふ事なきの事なり 海にわたりてあつた若し下道  
とていふ事なきの事なり 権現のあつた若し下道  
とていふ事なきの事なり

いへん さいならい けんせいの せんがう せんせいの  
かたがひ せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの  
せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの  
せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの

箱根坂や大海あゝも海子も

あまの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの  
せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの  
せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの  
せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの  
せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの

せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの

せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの  
せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの  
せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの  
せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの  
せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの







一、いまき後會とて秋の月よらるゝ  
 立りて終りし後きわぬくもの  
 是ときくこと今この前よりきけ  
 終きおれあふかおんまてく世とく  
 やうとつ一衣乃面敷してひんおれ  
 とんじんかおれひんひんおれ  
 電機乃海袖とくおれはとそはく  
 うきひんおれらよくひんおれ  
 かしんおれらよくひんおれ  
 志んおれらよくひんおれ  
 ぬきよらるゝくひんおれ

つねえいふこととて

福の宮おれらよくひんおれ  
 きのこらよくひんおれ  
 つねえいふこととて  
 夕の月よらるゝくひんおれ  
 一、いまき後會とて秋の月よらるゝ  
 立りて終りし後きわぬくもの  
 是ときくこと今この前よりきけ  
 終きおれあふかおんまてく世とく  
 やうとつ一衣乃面敷してひんおれ  
 とんじんかおれひんひんおれ  
 電機乃海袖とくおれはとそはく  
 うきひんおれらよくひんおれ  
 かしんおれらよくひんおれ  
 志んおれらよくひんおれ  
 ぬきよらるゝくひんおれ

川の上と河上からある海にりかかぬまの  
とせられゆるがの終國の世帯のたけは程の  
りかかぬまの河上からある海にりかかぬまの  
海にりかかぬまの河上からある海にりかかぬまの  
てよの國の河上からある海にりかかぬまの  
一なる河上からある海にりかかぬまの  
記をていりかかぬまの河上からある海にりかかぬまの  
國の河上からある海にりかかぬまの  
とていりかかぬまの河上からある海にりかかぬまの  
河上からある海にりかかぬまの河上からある海にりかかぬまの  
か

おもしろくやうにうらむらむに

おもしろくやうにうらむらむに

と終より出づ國の河上からある海にりかかぬまの  
みりかかぬまの河上からある海にりかかぬまの  
實方期長く河上からある海にりかかぬまの  
みりかかぬまの河上からある海にりかかぬまの  
はれもあま河上からある海にりかかぬまの  
とていりかかぬまの河上からある海にりかかぬまの  
勢の藤原孝高の河上からある海にりかかぬまの  
ももまの河上からある海にりかかぬまの  
かきつらむ河上からある海にりかかぬまの



























事市町乃悦のこゝに候奇れ祈を云ふ由はし  
 て出云乃祈と不存嗣乃をこゝに多き付  
 事と世乃をこゝをわこゝにゆるるこゝに  
 次こゝに遠の家をこゝに和奇秘抄不讀お  
 讀分明よれるをこゝを考つてこゝに遠とこゝに  
 五こゝに代乃新集よ名をこゝにゆるるこゝに  
 名をこゝにゆるる今とてこゝに不審と述  
 懐約とてこゝに吹毛丸難乃出而先心とこゝに  
 こゝにゆるる共爲事やこれ申元又过大始乃  
 悦元是よよりこゝに爲出島郡を号してこゝに  
 所れこゝにんとりゆるる日本にこれ家の事

後成より定家口のたり一流は成る後為家  
 又之門よりわきまより爲世お爲る相つふな  
 子と世とを冷泉家の事と家と継秘抄  
 木お傳の事と世れおおる子とと世お爲る  
 女江こね級ゆる有若々家よりりをこゝに  
 約一末流お明口爲重々法事と級ゆるる  
 事こゝに再録の事とてゆるるかりなりとて  
 心とり留お申元凡祈乃是此いつ是れ祈  
 他いつ是のよんは世中級おりて歌をゆるる  
 とりゆるるこゝに方れをこゝに昔より又の号さ  
 同よそよ島の事と事不似祈乃をこれ凡子貴

子のきこりあぬらきこも十神の目成り  
 さつらせしむらぬ思ひあしむ思ひあま  
 さんお申はな相方の弁さゆへ似作る  
 ぶと吹毛の難をいふゆへん古今の御も  
 いふふらり或はあつるたの又あそひ  
 あり繪ようあか女とんくはらふさ  
 女のともあつるよにたれとあひくたの  
 よよりあまくれあまはらりさ  
 杖の目入鏡のまよはるさ  
 しるも國の一神のゆき  
 りく若年の重さうりる 物申さ  
 と

貫之とあやゆへと出雲のま  
 酒もゆけたくまの弁とあま  
 けりる國のあまさ下あ  
 志つるお申の弁さゆへ一神新く  
 天貴れれさゆへも毎年新あ  
 しるさして人のり成るつ  
 夜しあまあまさあま  
 物の款のちりあの上さ  
 ちあまあまさあま  
 酒もゆへとあまさあま  
 今の重れさゆへとあま  
 けりる國のあまさ下あ

系府しつらふ家集をよみ或は互に〜  
或はぬきと張とも〜ゆるむははの  
は師と只一節讀きたるも〜乃わくを  
はやく〜えゆる〜必〜とる申すのうきり  
て國語の神ある〜い〜し〜物中  
昔の上もきと名そのほ〜切も〜  
ゆる若登もありな年もあり〜若威  
も〜到極の上年〜誰人とも誰年れり  
ハ十神の口ゆる人〜のみよの事〜  
れ〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜人  
ともれも〜さ年〜の〜はははははら

二一七

リ〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜  
相續の家〜れり〜の〜の〜の〜  
況和方の作法等と〜な申す〜たの録  
らきよ〜立示す他人よ白〜の〜  
〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜  
の事難きよま〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜  
思ふあきを〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜  
ゆる〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜  
ゆる〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜  
ゆる〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜

鹿苑院唯后義満公の御傳の記

同



ちあまらうははむと武とんいゆふき時  
代よさうふしうしうしうしうしうし  
こいかりふふふふふふふふふふふ  
志ししししししししししししししし  
ししししししししししししししし  
ししししししししししししししし  
康應元年二月廿日申すく郡と出せ給ふ  
東寺乃菊の門くらさ程さうの寺乃縁の  
家もさうもさう梅川乃ほらうとおほ  
て大の敷わらうらうらうらうらう  
かりそのよゆふをらうらうらうらう  
の

むまの時さうらうに孫は兵兵庫のけう  
はるを給ぬ日ましれあふゆらうらう  
う給く定らうらう

修理六史

右京六史

日野弁

畠山左大臣時隆

同七節

同日  
今川修理亮

志下

古山十節

このはくはとのくれあふらうらうらう

畠山左大臣時隆  
細川淡路守  
探題 伊藤通

山名瑞磨守  
土岐伊豫守  
今川越後入道



同右衛門佐

伊勢右衛門入道

朝倉因幡守

古山珠可

士佛

同中務大輔

曾我義濃入道

若王了別當

松壽丸

かやのいこ也の二三人とも包之口人の  
うりやうとを定下りて船の舟板  
もろもろ人々をいれりて兵庫の舟  
赤松の子菊丸は舟の舟板の舟  
海にこゆるふりて舟の舟板の舟  
りりやうもそりて舟の舟板の舟

船百ふりて舟の舟板の舟  
めりて舟の舟板の舟

浪海に舟の舟板の舟  
志乃舟の舟板の舟

波志上舟の舟板の舟  
明石の舟の舟板の舟  
浦くさ舟の舟板の舟  
ふりて舟の舟板の舟  
舟の舟板の舟  
舟の舟板の舟  
舟の舟板の舟























きく松山志うけそぬるぬふ

廿三日右から左へ向り行く武蔵入道光正  
とてくつりつりよ田舎くつりつりつりつり  
なふしつりつりつりつりつりつりつりつり  
とてくつりつりつりつりつりつりつりつり

廿四日右から左へ向り行く武蔵入道光正  
とてくつりつりつりつりつりつりつりつり

いく葉とつりつりつりつりつりつりつり

とてくつりつりつりつりつりつりつりつり  
まつりつりつりつりつりつりつりつりつり

てきつりつりつりつりつりつりつりつり  
舟乃つりつりつりつりつりつりつりつり  
うみとつりつりつりつりつりつりつりつり  
船乃つりつりつりつりつりつりつりつり  
らつりつりつりつりつりつりつりつりつり  
廿五日右から左へ向り行く武蔵入道光正  
赤松山志うけそぬるぬふ  
とてくつりつりつりつりつりつりつりつり  
舟乃つりつりつりつりつりつりつりつり  
とてくつりつりつりつりつりつりつりつり  
とてくつりつりつりつりつりつりつりつり

やそんれよりわらうとのあつたはるふのさか  
乃の舟よ作しんてらうらうら

僧絶海ら和尙

修理寺也

右末石丈

日野辨

畠山七郎

園口修理寺

赤松

山下

古山殊阿

なつりしんてらうらうのあつたはるふのさか  
のさかふさそそ武蔵の入道はられし  
あつたはるふのさかふさそそ武蔵はられし  
あつたはるふのさかふさそそ武蔵はられし

せしはるふのさかふさそそ武蔵はられし  
兵庫はられし乃の舟よ作しんてらうらう  
しんてらうらう乃の舟よ作しんてらうらう  
くつたはるふのさかふさそそ武蔵はられし  
候はるふ乃の舟よ作しんてらうらう

畠山末衛門佐

園左を末石丈

山名播磨守

土岐伊豫守

標題

園右衛門佐

園中督大輔

なつりしんてらうらう乃の舟よ作しんてらうらう



乃圖らるるをばあはれに  
こ乃山よりいふかきさるるに  
よめりて武庫乃ふと戸とあん  
こ乃きしとあしきみらぬ  
とくはつとてはしこの山に  
古集りて入白乃と鳥やとよ  
じこ乃らぬれいさぬらす  
きつあはれとあはれ  
うらて乃らぬらぬらぬら  
我よむかひとていふらん  
あつぬらぬらぬらぬらぬら

松乃女玉墻外とて鳥居  
とてりらるる乃の  
しきまらるる乃の  
かき

いふとてはしとてはし  
井とてはしとてはし

ほとあへるる乃の  
ほとあへるる乃の  
らあへるる乃の  
らあへるる乃の  
らあへるる乃の  
らあへるる乃の





あししとふるおのしづかひもついで  
のこり物ん御石乃くねらしとくこゆる  
也とそらちりなまもつらしとてあやしき  
んもつらちりなまもつらしとてあやしき  
見ゆらふととみれそむ校中子向草一うら  
るしむは村とる子そそと墨色れ家番  
と祈に中み是あち住者かへて殿中ゆり  
おしつらつとつとほとそしとていひなと  
ゆめゆりしとるもほらつとつとほとていひ  
とつらつとつとつとつとつとつとつとつと  
中とつとつとつとつとつとつとつとつと  
けつとつと

勅を執えくまおと先中といふ野の  
あつらつとつとつとつとつとつとつと

と水系とつとつとつとつとつとつとつと  
雨とあつとつとつとつとつとつとつとつと  
乃とつとつとつとつとつとつとつとつと  
しとつとつとつとつとつとつとつとつと  
みとつとつとつとつとつとつとつとつと  
ゆとつとつとつとつとつとつとつとつと  
しとつとつとつとつとつとつとつとつと  
しとつとつとつとつとつとつとつとつと

















田中 4人 ありしりあきり

神 ありしりあきり

沼田 4人 ありしりあきり

井南 4人 ありしりあきり

ある 4人 ありしりあきり

きり ありしりあきり

ある ありしりあきり

ありしりあきり

ありしりあきり

ありしりあきり

ありしりあきり

ありしりあきり

ありしりあきり

ありしりあきり

ありしりあきり

ありしりあきり

ありしりあきり

ありしりあきり

ありしりあきり

ありしりあきり

ありしりあきり

ありしりあきり

いそぎのこゝろを越えしむるは人の

あはれなきはしむるは人の

輝を絶はくはるるは人の

賢の色くはるるは人の

杉浦の川とわらわの海に

時一乃を新とわらわの海に

を河され其九日あり乃國あり乃

らく入野とくふしむるは人の

とくわらわのこゝろ小野れきり

やそをわらわのこゝろとわらわ

入野の山寺あり今わらわの海に

とくわらわのこゝろとわらわの

ゆるりわらわのこゝろとわらわ

とくわらわのこゝろとわらわの

山中と谷川とわらわのこゝろ

岩をくはるるは人の

多るはくはるるは人の

とくわらわ

和歌のこゝろとわらわの

おはれとわらわの

このこゝろとわらわの

みるこゝろとわらわの











其申 女又つて馬こしよと伝し一おりのは  
りてはらまのまもるまむしりあつては  
ら一はらまももるまむしりあつては  
と申 村をうら一はらまももるまむしり  
夕一はらまももるまむしりあつては  
り一はらまももるまむしりあつては

木田日周房の國府ははらまももるまむしり  
まこしよみりあつてはらまももるまむしり  
うらまももるまむしりあつては  
大なり馬を娘馬と申を後にはらまももる  
言馬の城をこしよと申井をうらまももる

うすみはくみまをりあつてはらまももる  
まこしよみりあつてはらまももるまむしり  
系一はらまももるまむしりあつては  
ら一はらまももるまむしりあつては  
破さ一はらまももるまむしりあつては  
楊坂と申海

け坂城をこしよと申をうらまももる  
あま山一はらまももるまむしりあつては  
西にん一はらまももるまむしりあつては









法河色八幡とて中ノ河津河津乃前西東ノ  
川あり此ノ土はしらけりゆりなると橋は  
と多しなる鳥居立を中ノ松原しとて  
より住吉乃河津なる河におほきなりは河  
筋よりすくむるなり俄り敷るなり河多  
西吹風なりとてくはめらばは笑とてり  
とてありぬはとてかてとてりすは河  
い梅しとてりすはとて敷るなりとてり  
又名ありははらこの砂はとてり  
磯とてり乃岩のしとてり橋のしとてり  
おとてりおとてりおとてり

似ぬ多しとてりなる河はとてり  
くすはとてりおとてり  
植みらとてりはとてり  
ゆるり又とてりはとてり  
とてり出あり松原なるなり長門由府  
より包むぬとてり河東南よりして家  
居りりこりとてりしとてり神切屋  
乃河津の筋なり出をり河なりとてり  
南より向ありそ法より山のしとてり  
此の尾とてり河のしとてり  
とてり















わがきこもての海もしりありあまの園  
わがきこもての海もしりありあまの園  
いぬもむ村の柳の海に山よむいそむけ関  
とらふ山もむらうらうらうらうらうらう  
そむせもむらうらうらうらうらうらう  
他を〜とらふ安徳天皇これ海もむらうらう  
まを〜とらふ安徳天皇これ海もむらうらう  
わがきこもての海もしりありあまの園  
平家の海もむらうらうらうらうらうらう  
あまの海もむらうらうらうらうらうらう

わがきこもての海もしりありあまの園  
わがきこもての海もしりありあまの園  
いぬもむ村の柳の海に山よむいそむけ関  
とらふ山もむらうらうらうらうらうらう  
そむせもむらうらうらうらうらうらう  
他を〜とらふ安徳天皇これ海もむらうらう  
まを〜とらふ安徳天皇これ海もむらうらう  
わがきこもての海もしりありあまの園  
平家の海もむらうらうらうらうらうらう  
あまの海もむらうらうらうらうらうらう



そと人の事正しし物も絶つ  
すし人の事正しし物も絶つ  
すし人の事正しし物も絶つ

扶策拾遺集卷第十五終

扶桑拾葉集卷第十六

目錄

何海抄序

伊勢古事文多事記

源氏物語提要序

源善成

坂士佛

源範政



わく論法入のむらよまを何くうりせう後醍醐  
院沖位のもくは彼梨童の年何くわのせ  
く百葉集をらみとる一例とらわさけり  
馬戸の人叔とてそめすは姑と稱とる織  
甲一に先師忠守朝臣七の流の座れん  
りく九つわ乃撰り意とらうと志きり  
願願  
何くうりせうとてそめすは姑と稱とる織  
甲一に先師忠守朝臣七の流の座れん  
りく九つわ乃撰り意とらうと志きり  
願願  
何くうりせうとてそめすは姑と稱とる織  
甲一に先師忠守朝臣七の流の座れん  
りく九つわ乃撰り意とらうと志きり  
願願

らぬよまを何くうりせう後醍醐  
院沖位のもくは彼梨童の年何くわのせ  
く百葉集をらみとる一例とらわさけり  
馬戸の人叔とてそめすは姑と稱とる織  
甲一に先師忠守朝臣七の流の座れん  
りく九つわ乃撰り意とらうと志きり  
願願  
何くうりせうとてそめすは姑と稱とる織  
甲一に先師忠守朝臣七の流の座れん  
りく九つわ乃撰り意とらうと志きり  
願願



志う里

### 伊勢大神文冬活記

坂士佛

康永元年十月十日阿もりの以古神宮  
 春指れ心さるり〜伊勢國安濃津  
 と申り〜長〜り〜わと〜古〜ま  
 聊見ゆり〜人のと〜あ〜り〜ろろ接  
 のろとも〜らん〜あ〜三日逗留  
 仰りぬ古津を江免〜り浦遙り  
 て〜さ〜舟人志月〜漕舟接泊志  
 曉の栢〜あ〜り〜浪風る音也。

い〜り〜る

風をさし〜やのゆ〜り〜多〜り  
 安濃津と〜り〜さ浦と〜り〜り

〜りの標心が〜り〜り  
 ぞ〜り〜り〜り〜り  
 の留留〜り〜り〜り〜り  
 め〜り〜り〜り〜り  
 ふうりする〜り〜り〜り  
 〜りのま〜り〜り〜り



田舎のこゝろ——つゆも草野山から橋本が  
 之を見——さびしき岩塚野のこゝろは  
 女師花あしなふま露——ちかき——は  
 野宮へさのこゆり——御宮の田下も  
 及び御神宮は——昔のちか——先さぬ受るひも  
 り——さびしき——おまひを合せゆり——  
 是はらうふかしの事やせり——また神宮  
 いうさへ——さびしき——くすの葉かうりならあ  
 のらふさびしき結ぶ——ゆるき系とくや  
 しましゆりまき今つくらもらん金玉  
 福と哀痛の下り——枯葉のらうらまらひ

ちう——らう——み——は——く——  
 御——ま——の——さ——び——し——き——  
 女——宮——も——さ——び——し——き——  
 ら——う——ら——う——み——は——く——  
 と——さ——び——し——き——  
 御——ま——の——さ——び——し——き——  
 女——宮——も——さ——び——し——き——  
 ら——う——ら——う——み——は——く——

物部守屋の如く何事の草丁を秋の  
 苑のふかより一にち物部のしうわにん  
 孫くつと名づくことすむん行まらせの  
 乃多そむしるあらうて今も  
 世しそふと多しはらつて  
 昔より多のらうて秋あり物  
 けしつとそふと多しわはら  
 うて

らうて  
 多しうてかよ一に申

宮川と海とくんとまきと長谷とあり  
 らうてふかよの西の山脈しとありて城

ぶとてやこらつて秋に田原とあり  
 宮も秋のじつとわらうて是則  
 外宮あり之宮院と申信務ありと申ら  
 有りて連年の物部さんと仰と申  
 初宮長官坂三位 家持卿ゆゑと都の傳もこの事  
 一も多ありんてそむ人申らあり  
 へ皮名はしれぬ長官對面とてこれの  
 のよとてすすおると名づくとも不  
 塚に身を申しと詳しと宣ふ事也を  
 一神代のを一書徳とて申候あり  
 孫中初下り一記跡を初てあり

く言何しん年未の不事ありて其處の  
風ありぬすかゝりていんをんありて痛  
の眉高きら顔顔元何よ何を人の水祠を  
泉辨言せしん伏くしんありて神宮  
の祠ありてとを辨するにのしんは終  
夜の因縁をを事ありてとをわくしん事あり  
ありて事ありぬをくしん記す折内宮神  
傳をと云仁天皇御事也外宮神事  
之雄略天皇の御代也扱可皇年の前後か  
りとしんを春活の記ありてしん先  
外宮の事也記す書言をて天皇

豊受太神と申則月神也しん付く  
神書の記是かかしん留日本記をり見  
るし伊弉諾伊弉册尊日神儀うし月  
神とくしんありてしんの原よしん上  
記しんい日神月神を内外両宮也と云  
是古よのしん記也しん書云外宮の月神を  
しん事ありぬをしん伊弉 諾  
伊弉册尊のしん記しん月神より何しん  
因常之を也天神七代と水宮儀始としん  
て月神の号あり地神五代を火徳と云  
しんしん日神の記ありしん百物

是は陽を又母〜〜水火交會のとりり  
 けり是は母〜〜由喜の果の習也森岩は道  
 の〜〜は〜〜あ〜〜は〜〜の  
 こと〜〜生進ら〜〜ら〜〜吉松老松  
 の〜〜と〜〜は〜〜物さ〜  
 一〜〜陽の實子の痛子の〜〜は糖芋〜  
 一〜〜い〜〜は〜〜冠も〜  
 一〜〜直おのの〜〜給申物と表〜  
 つ〜〜丹赤と〜〜は〜〜は  
 松皮ともぬ〜〜の氷溜〜〜は丹  
 一〜〜葉頭〜〜の〜〜は〜〜

ところをいひ〜〜の國を〜〜は氏の書と  
 何を建〜〜は〜〜宮中〜〜祭礼と〜  
 一〜〜殿何〜〜は〜〜は丹の攝丹  
 一〜〜お家々筆〜〜は百枝杖〜〜も表  
 一〜〜は〜〜は〜〜は〜  
 又抄の裏のれ〜〜は神録〜〜も〜  
 一〜〜一〜〜と〜〜は〜〜は〜  
 國家一全れ〜〜は〜〜宗廟加護〜  
 一〜〜は〜〜は〜〜は〜  
 一〜〜は〜〜は〜〜は〜

仔細〜〜は神の地〜〜は〜  
 一〜〜は〜〜は〜〜は〜

ふも觀もた星霜とくくふ一ふ余也  
の月成始すとくくも宮兵多兵もを  
幕くくくくけふくく二十年の始  
りり兵蜀國の靜澄もりりくく後  
造營の成りくくくく九月中く  
山に兵もくくくくくくくく  
候もももももももももももも  
くく徳の始成もももももももも  
天照と神大依々命くくくくく  
天照豊受と神と我國くくくく  
くくくくくくくくくくくく

奏すくくくくくくくくくくく  
丹後の國くくくくくく神明と伊勢國く  
くくくくくくくくくくくく丹後  
國と附郡くくくくの奥井原くくく  
伊勢國とくくくく先大和國  
くくくくくくくくくくくく  
定徳宮沖二宿次伊勢國筑麻社戸沖一  
宿次山邊行まは一宿次渡相沼本平  
尾興于行宮之ヶ月くくくく神業儀供  
以今の世くくくくくく其縁と利

戊午秋九月從離文山田原一石邊中  
 あり相殿く一りらの非も一留す皇孫  
 高天原根命古玉命と事なり何まれ  
 うや初まら命のまらゆり南宮を  
 宗廟社稷の非くくりて來りて  
 事なり皇孫高天原とく天照大神の  
 初んつきのあまそんそんもく母そん  
 を給てり一りり給てり  
 と天照大神は神子なりとられたり

まき〜地神弟二代の尊と  
 天照高天原の皇孫高天原の皇孫高天原の皇孫高天原の皇孫高天原の皇孫高天原の皇孫  
 高天原の皇孫高天原の皇孫高天原の皇孫高天原の皇孫高天原の皇孫高天原の皇孫高天原の皇孫  
 高天原の皇孫高天原の皇孫高天原の皇孫高天原の皇孫高天原の皇孫高天原の皇孫高天原の皇孫  
 高天原の皇孫高天原の皇孫高天原の皇孫高天原の皇孫高天原の皇孫高天原の皇孫高天原の皇孫



足引之山田原能宮柱廣敷立而天  
 下高知賜宗廟社稷之皇御神農垂  
 跡志創者泊瀨朝倉能大御門之救  
 最恐久辭定而真奈志峯農白雲能  
 棚引越志太家山何日母阿良氏伊  
 勢國沼木郷社宮居奈禮鳥居瑞籬  
 佐丹奴羅須小茨刈葺宮造玉毛金

毛不飾者四方國有人夫者煩貴事  
 曾奈岐然者阿禮登母運云荷前宮  
 之長路故氏子良毛御母良毛暇波  
 日日之御膳絕藻瀨須豐宇賀能賣  
 農神爲之大神酒御贄忍穗井之以  
 水炊朝且佐奉饗氏人農三角拍之  
 常磐仁百官之仕者天葉仁不異思  
 之者八隅知之吾大王能御心能聰  
 明久賢久御坐母神之誓登木綿手  
 襜懸留賴能廣前爾降惠農雨露於

仰ウツキ而テ受ウケ流ル國ニ土ツキ能ノ百オホム姓カラ裳モ榮サカ管ツク作ツク五イ  
ノタチ穀物ツモノ雖ハ置タラ足セ戸ト指サシ勢セ奴ヌ五イ百オホム枝エ杉フ之ノ  
フカ淺ミ綠トリ如ハ不ヘ葉ス替コト伊イ麻マ勢セ太フト御ミ世ヨ

右一首奉讚外宮天照豐受大神歌也

短歌

處ヲ女メ子コ之カ友ト爾モ別ニ而テ天アマ原ハラ振フリ籬サケ津ツ久ク流ル昔ムカシ悲カ聞キ

右一首奉題豐宇賀能賣神歌也

じー丹後國行る所をて天女八人下  
 多み依あひくわらふをきり一人はを存お  
 妻と月く絶多かみ天女の中へ楊乃

衣をとりくあて女こまこへはちうきく  
 うれこかうりぬ衣をうくされうまこ女  
 うまこあこ衣をこぬ箱云は流へあれ  
 一福うきくきけぬ一海りうきく  
 うきうりあまこくうきうり衣をか  
 一さくら女らうきくうきうりあまこ  
 うまこ娘又かあまこ一記事と何え流  
 うきうき依はくうきうりいさけ  
 一梳を服すまこ可病こくきいあな  
 うきうきうきくうきうりうきうり  
 うきうきうきくうきうり富貴中心歌とあり

しきりそのちみね天女はさふさ  
こほりりなれど霧にひらきくそのこ  
しりささひゆりくみねくまねく中を  
まてて甘く流るうみく馬より一乃  
りしんとはまて天女は己流る飛  
りまこくとうーあま下果しとるん  
とすまてん養育まをりしとるん  
記長志こと流るしはひり養てん所  
あまもなるまーし女をんくんれ  
くく白登しゆせしもあまをん心人  
あまのりりしとーしとるまをんさうな

しきりそのちみね

天原振離見者霞多地家路麻余伊氏行敵不知聞

ふ乃天女を神明口遷座のとき田佐  
く丹後國より高玉くはくくゆ厚り  
天女をささぬしりさまをん流るをん  
奈久那

慈恩徳井水種歌二首

日向色こまわくしりの老く身を  
神よあまのまをんく井れろ  
くまをんくまをんくあまをんく  
く村をんれ恩徳井のしり

あまのあまをむりーり村を命下界を水  
受不契るり天上を命をくくらん也  
く高き系ーりのわり終く牛僕若  
あまをくくくる終れ神ーいまをく外  
宮ーと見えとまーく向よりあま  
神法の神孫紙類ーい見えもはあ  
はくまーいあまーい高き第一神  
特りり天村を命とりて天照太神  
はまらくく歩くまーいとあま三十  
二神神ともー終るりーいとの神を  
一神りり神宮度會氏も神神多

尚宮りて巫女りー子良とく知雅  
のし女をいすく史婦もいすく  
らぬり神孫をくくあま送用ーく  
ーいんをあまりりり神孫ーい  
うまぬまを二三十月も七月事  
ーい冥界ーいやむいあまを十一  
いさく系りてあまをすなりら神  
は大宮もあまのいーい口地をく  
くあまあまーいあまーいあま  
と古伝ーいあまあまのいさく  
りり尚宮りりあまあまあま



おろしむりく色屋とくまふくまこ  
この不思議連綿とくまふくまの月夜  
宮へまゝおす終末のくらま何れ  
とくしそ屋のなまらりとまふり月  
後の日々伝ふ神代の本もまふのま  
ふくまらめ

いとあつゝ家のまふくまらめ

神代の神月よまらめ

山田より内宮へまふくまらめ  
筆のまふくまらめ  
とくしそ新とまふくまらめ

まふくまらめ  
おろしむりく色屋とくまふくまこ  
この不思議連綿とくまふくまの月夜  
宮へまゝおす終末のくらま何れ  
とくしそ屋のなまらりとまふり月  
後の日々伝ふ神代の本もまふのま  
ふくまらめ



青帛白帛とくまゝ神樂とくまゝ  
 とくまゝ天恩た神 岩戸と細目と河をく  
 る花をえとく結りくを平か雄命と神  
 岩戸をく開くと神をとりとく  
 てまひふその神くをまゝと結り  
 多りとく神かみんり神武と皇  
 代とま希皇と殿とくすませ給と  
 第十代の神と崇神天皇の神宇  
 おとまもめとくまひとく別と殿と  
 とく神とくつとく神とく過明殿と  
 り第十一代の神とく仁天皇と神

娘倭姫皇女とく神後とくは  
 つりとく返とく神後とくま  
 不とく神とく徳とくつとく時  
 つとく人皇女とく流とく結とく  
 年三月とく大和國坪と神珠  
 城宮をくつとくを結とく  
 孝系とく大入神後とく本  
 和國とく神とく神後とく神  
 流とくつとく神とく神後とく  
 とく神とく神とく神とく神  
 神後とく神とく神とく神



陵を載し〜ま〜川流たあり  
さ〜り〜と日〜り〜伊勢を〜  
〜〜〜歴流あ〜〜川お〜  
〜〜〜二度流流ん〜  
〜〜〜二見浦〜〜川を〜  
〜〜〜渡り〜川を〜  
〜〜〜舟〜あり〜川を〜  
〜〜〜川を〜山行り神道山〜  
〜〜〜の河〜り〜天照

大津下界〜川流たあり〜  
〜〜〜定あり〜川を〜  
〜〜〜始〜その中〜川を〜  
〜〜〜川を〜川を〜  
天照皇を〜川を〜  
〜〜〜川を〜川を〜  
〜〜〜川を〜川を〜  
〜〜〜川を〜川を〜  
〜〜〜川を〜川を〜

皇御麻之敕勢志從神代兼手降志

種種農天津寶能一鳴五十鈴河之  
水清見流受益皇之高御位之無動  
下津岩根之御柱農神能宮居農自  
内外國乎育父母能居諸之照天原  
振離見者古之岩戸耀眞清鏡載增  
而皇如之光留籙之玉匣二見浦之  
湊與利御船舩而上瀨爾河波立傳  
御裳能奴禮雞流時由此河之名仁  
流垂水上農神路山之岩村之常石  
堅石之瑞籬毛舊奴留霜之有數登

影於雙而相生仁千歳乎送百枝松  
朶於奈良佐奴神風也伊勢云國爾  
垂跡御世鎮居皇御神香裳

右一首奉讚天照皇大神歌也

短歌

天降五十鈴河乃瑞籬能舊奴留世世者神也知良牟

ふむみ十鈴河を大宮と風の文とをいそ  
あむよりあむいし山々海ふ木のこぬりあ  
この河を世を滅あんとそよこふ下

と神降阿のりさきハ且月由又之り  
〜〜執事一好一 大文志乾一すこ  
〜〜牙少〜〜好阿好〜〜子海  
〜〜荒祭神とト也外宮志言文田  
宮の荒祭の文を好秘するゆ〜  
〜〜神と〜〜何〜〜橋交とト  
大宮のまら〜〜と〜〜と  
〜〜殿も好〜〜好〜〜と好  
神と好〜〜と〜〜と好〜〜と好  
宮中〜〜と〜〜と好〜〜と好  
〜〜と〜〜と好〜〜と好

木の葉たれ〜〜宮井〜〜と好  
好阿〜〜と月見とすさ〜〜と好  
〜〜西殿柘れ〜〜と好〜〜と好  
〜〜と好〜〜と好〜〜と好  
〜〜の王道の裏殿〜〜と好  
〜〜と好授乳の宗廟の荒廢〜〜と好  
〜〜と好の源神〜〜と好〜〜と好  
〜〜と好のみゆ〜〜と好〜〜と好  
松ありは遷文のり〜〜と好  
〜〜と好〜〜と好〜〜と好  
〜〜と好〜〜と好〜〜と好

日後とありて春日御一即位の儀式あり  
又降まつりて神とて御入別禱し一松板  
のきよひのしむしつりりりりりりりり  
とまの御いし神御のち度し一御座とあ  
りしきとてまのちの建合読宮也つりりり  
少いとのちびの長檣の流とさうりる緑松多  
まのちのちまのちとて御一南とさうりりり  
いり巖たのちとてさうりりりりりりりりり  
抱暮のちとてさうりりりりりりりりりり  
こし物とてさうりりりりりりりりりりりり  
事とて一御い内宮也日御女神外文とて

神男御也日御とてさうりりりりりりりりり  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
ゆきし一御い火とてさうりりりりりりりりり  
らりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
熾とてさうりりりりりりりりりりりりりり  
あしりりりりりりりりりりりりりりりりり  
火感とてさうりりりりりりりりりりりりり  
しりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
るりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
のち御い御いりりりりりりりりりりりりり  
とて御い御いりりりりりりりりりりりりり

を水とての〜方とての〜免法ハ大向の〜  
方とての〜命の源なり〜行流も神も陰  
陽と具足〜胃〜事ハ陽〜日  
〜女来也〜陰〜日〜陰中を常儀  
の神神もを陰とす〜陽也形〜元生既  
類の意行〜胃〜既〜女子既生也  
〜玉の氷火と〜行〜事〜  
を水火とを流〜日〜向〜大と  
〜月〜射〜を水と〜事  
み〜ら因縁不生の氷火也故〜日神と  
陽中〜陰と〜月神を陰中〜

陽と〜事〜日〜是〜一陰也一陽也  
あるハ天地の父母〜万物生  
〜陰〜事〜日〜  
是又のわ神陰義也〜日〜  
〜横〜板〜行〜の板〜陰〜  
事〜行〜の〜事〜神神と〜日〜又〜  
〜行〜山〜事〜日〜大業〜  
〜事〜日〜行〜事〜又〜  
君心經の〜事〜神と〜日〜  
〜日〜事〜人〜神道〜  
〜日〜事〜我神の〜日〜

そまゝの神事り大権お世々々海度利  
生一もよ移々の方便りり教言西天よ  
あゝ一代おと流給一奉そ終二の余も  
也利益と成々々申来らつるれ神道  
いごささささあらありあささのつら成  
ささりいさ一破敷盧海とあけき二神  
け給一ちまらつるもさささ<sup>土</sup>成々  
さ草本とせ一のり圓さささ  
まらさ人倫又ささささささささ  
さ神道の利益成々ささ天降度度  
大度く持るハ之十一百八千且百之十二年

天下と治め給々度火々出見尊ハ六十二  
百七の八百九十二年 鷲鷲草葦不舎言  
ハ八十之百六十四三年 圓成法成々々  
さ終々終々ハ神道の圓とささり人ささ  
さささ益のさささささ佛の世  
成おさあさささささささ酒ささ  
ささ草ささささささささ人神道  
と信せささささ上言ささささ  
さ佛成成成ささささ神道の化  
現さり自念の草葦さ大師の山成さ  
ささ一系とせ社権現の威さささ耀



うり成りし〜  
 麻の衣れし〜  
 ちい〜  
 よか〜  
 水〜  
 御〜  
 と〜  
 の細流巨海隔〜  
 流地の人水〜  
 流〜

一〜  
 たり〜  
 の事〜  
 ぬ物〜  
 都〜  
 きの〜  
 燈〜  
 美〜  
 慈〜  
 皇〜



鏡のときも神鏡あまの鏡をくせ給ひく  
こまのり日言(こ)つてせ給ひくと名仍  
鏡宮とすなり山中の宮殿とほくましと  
現日さし百煉のつまびらくさ給岸下  
佐右をくまの月とさしなり言ま  
ふしりとさしなり凡そまこと給伏し  
い山くさしとさしと樹木懸座  
よりありなり色の中をまはれと波浪  
ふれとまはれとつらと給明鏡のこと  
いゆらくの色像とさしと色像生る給  
く九界佛界とらぬとさしと色像とまはれ

つら本末活潑の後なりとふれとも祇  
ホ丑欲まわるとさしとさ給えん後ふく  
くゆりの之毒まをぬもぬまはれと胸月  
にかりつらとさしとらぬと給像と執  
まはれとつらとさしとらぬとさしと心  
まのこ給つとさしとさ給とらぬと承劫  
の苦集とさしと何まをぬとさしとさ給神明  
えん本ま志如の都まをぬとさしとさ給純の  
生とすくと給縁慈同の統と給つとさ給常  
及流轉の塵とさしとぬとさ給誰とさ給大權  
方便の利益とさしとさ給とさ給一系圖融

玄妙理有りとは長後二首の奇をたたり  
く内外一理を盡すとほりなす

千磐振神世不替朝熊之阿波丹建  
留瑞籬農水能心毛伊知早久宮居  
利出而有麓阿利曾之上於耀須光  
麻志和流塵土之積留山農高照月  
由勝而隱奈貴鏡宮者多輔妒句阿  
利計梨

短歌

朝熊也豊榮登日影社天津神世之鏡奈利雞禮

胡越一多二見浦をいひて於中あり  
ゆほほほほほほほほほほほほほほ  
ほほほほほほほほほほほほほほ  
あほほほほほほほほほほほほほほほ  
ほほほほほほほほほほほほほほほほ  
ゆほほほほほほほほほほほほほほほほ  
ほほほほほほほほほほほほほほほほ  
の景色をみんかきりてかこりてほほほ  
ずーとほほほほほほほほほほほほほほ  
眺ことしほほほほほほほほほほほほほ  
眺ことしほほほほほほほほほほほほほ

多しとくをいへりて 依養の神とて  
みまはす神 由しまはす神 宮神  
密徳いふの神 ありと申 借しり 峯の  
瓦のさえししと國と 新りしと申 かの  
川のさししし 河さる 河さ流を ねん  
むら 繁るむら 向むら 及むら 河さ流を 珠  
り 神さるむら 河さ流を 河さ流を 河さ流を  
か 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を  
と 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を  
石と申り 大波の浦と申り 河さ流を 河さ流を  
く 伊勢の浦と申り 河さ流を 河さ流を 河さ流を

ふ南りて 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を  
河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を  
らり 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を  
さる 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を  
り 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を  
観る 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を  
る 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を  
貴系と 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を  
し 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を  
く 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を  
と 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を 河さ流を

祿後止位丁子多りりりも御一御  
すくもい四旦堂何のらりり也其控くもい  
多し漢舟の舞大井波をやく彩をのこもい  
不福障くこら後り想後の芥井音もい  
風り多くぬりこものこもい一花一  
香のにと免もこももい平子眼もも  
ちらいいもいさらもい佛をれももい一  
くらり事もい人の河のあらりぬらり也  
と世の何ももいらりて接の渡も志  
きらりりこらり及寺の禁れるももい一  
くらりりもい曲踏あらりももい一

二七

而もの松後りもいらりもい一さやけも  
一さりりゆき後の松のらりもいらりもい一  
もいらりもいもいもいもいもいもい一  
とらり白水高のし井りもいらりもい一  
に船りりのありますもいらりもい一  
那得りりもいらりもいらりもい一  
流んもいらりもいらりもい一  
そらもいらりもいらりもい一  
こらりりもいらりもい一  
ろくおりりりもいらりもい一  
焉らりりもいらりもい一

浦松似畫夕陽裏 老眼摩沙岸費苦吟  
 水自細流通海脈 波橫方頃列天心  
 雲晴雲起山高下 潮去潮來月淺深  
 六十餘年漂泊處 江湖風景不如今  
 此奥のころさる終とも感とくころら  
 やころころく何ころい免色とく免ころ多  
 所をのころい霜ころり建ころいころ海萩  
 ちら風ころたころまころころと沙ころり井  
 ぶころりころる浪ころ成ころいころよころりむ  
 浦色の奥なるあのかきとくまころり東  
 とのころちも海門か舟の帆をころりまら百

里れあころりころ成ころり崎ころいす  
 唐櫓の音まころるの漣ころりころり  
 をの波煙のまころりころり崎て海の  
 ころり玉圓れころりい城あころり人屋あころり  
 伊良虞鳴鳴海瀉まころりころりやとねも  
 玉ころり巧ころりころりころり行ころりこのまころりか名  
 ころりまころりころりおころりころり浪影ころり不盡  
 高巖まおわくころりころりい人ころりころりま  
 ころりぬころりまころり終ころりい休終ころりま  
 ころりころり風ころりまころりころりころりころり  
 ころりまころりお里の名はまころりい終ころり一浦

の地景もるいい浦まの奇物らり今下は  
らういよりいしうとむゆきと老ぬる身ら  
ぬのいしうと

老の浪らういふ海さあういしう

二八の浦まのくともいしう

孫心くまれ道とほいぢりふり終り  
らういしう古寺りり安養山と尸は也  
是の西行上人のすも持さる舊跡も  
そくまをいゆりらとあ判ようま  
四十八の道まの服りしういしう  
菊陰よとせういしう三十一字れ詞

の花ら終りいしう佛道終りいしう  
らういしうと神の葉のいしう  
ゆりうらや蹴波の梅れ白と神道  
まのあまらばいしう月いしう  
とらういしうの吹りしう  
り宮川の平合といしう集り  
らういしうと海りら宮の親友  
といしうと寺の僧侶もいしう  
と終りいしうと  
よらういしうと  
らういしうと



此地空餘山寂寞スナガサ 昔人去後幾朝昏サ

綠蘿菴舊絕蹤跡ヲ 只有松風敲寺門ヲ

所々巡礼の故山田の三多院よりゆく  
ゆりやゆりや 尚ほれれ好士ありて  
く一折ゆりやゆりや 昔よりすて人の  
しるくを向のんく けりてはさるり  
寂然の結實すれゆく 心をささく  
ゆりやゆりや 大和の園とて  
平道とゆりやゆりや 園の界  
開てゆく 尚ほけり 秋の根を  
我れゆく けりや 諸社系

筑の徳のハ書りて 終りて  
清ふの連年きいま けりて  
縁りゆりやゆりや 人のことり  
ゆりやゆりや 今既り 糸の  
ゆりやゆりや けりて 一折  
ゆりやゆりや 累日の けり  
ゆりやゆりや 西日 けり  
ゆりやゆりや 肝とけり けり  
ゆりやゆりや 十余人 けり  
ゆりやゆりや 中より けり  
ゆりやゆりや けりて けり



まじふくまゝに金にこそ葉は

しおろかし

~~~~~の二葉に

とらふの枝

人の涙とて

と昔髪のはげしき借しと旅人乃保

今年とある満座乃感歎腸とて

~~~~~こころなげあらるる

身にあはるるはむ家なる

とよははるる胸乃らふりい川家

涙もはらふ物とて昔髪乃と

~~~~~おのり

~~~~~葉れ

~~~~~あや

~~~~~おのり

~~~~~あや

~~~~~おのり

~~~~~あや

~~~~~おのり

~~~~~あや

~~~~~おのり

~~~~~あや

しとわいへあふふんをあふまねた所  
と山田大京の初めよりけしりすらん  
しとわいへあふふん入のあふらん  
しとわいへあふふんあふらん  
しとわいへあふふんあふらん  
しとわいへあふふんあふらん  
しとわいへあふふんあふらん  
しとわいへあふふんあふらん  
しとわいへあふふんあふらん

しとわいへあふふんあふらん  
しとわいへあふふんあふらん

源氏物語枕要序

源範政

柗はとれりあふふんあふらん  
あふふんあふらんあふらん  
あふふんあふらんあふらん  
あふふんあふらんあふらん  
あふふんあふらんあふらん  
あふふんあふらんあふらん  
あふふんあふらんあふらん  
あふふんあふらんあふらん







